

普及センター技術情報 「今こそ！刈り高の見直し！」

牧草の刈り高は、牧草地の持続性や翌年の収量を確保する上で重要な項目です。具体的には、地際から10cm以上の位置で刈り取ることが推奨されています。しかし、できるだけ収量が欲しいなどの思いから10cm以下の地際で刈り取る場面が見受けられます。そのため、本記事では、10cm以上で刈ることのメリットを再度整理します。

①牧草の再生～翌年の1番草に向けて～

1番草の刈り高は、翌年の収量に大きく影響します。その理由は、チモシーの場合、1番草刈り取り後に翌年のベースとなる新しい分けつが発生するからです。

牧草は成長段階で、当年に穂を出す分けつと穂を出さない分けつに分かれます。当年に穂を出す分けつは「出穂茎」と呼ばれ、刈り取られた後は枯死し、再生はしません。一方で穂を出さない分けつは、刈り取られた後にまた再生し、越冬した後、翌年の1番草となります。

チモシーの場合は、多くの分けつ茎が1番草のタイミングで穂を出し、1番草収穫によって枯死していきます。その後発生する新しい分けつは、2番草の時期には穂を出さず、翌年の1番草を構成します。そのため、1番草刈り取り後に発生する分けつをいかに増やすことができるかが翌年の収量を増やすポイントとなります。

1番草刈り取り後の分けつを増やすためには、栄養が詰まったチモシーの球茎を守る必要があります（写真1）。チモシーの下部にあるふくらんだ球茎という部分は、葉が出て光合成を始める前段階で使う栄養が蓄えられており、分けつを増やすためには重要な部分です。しかし、1番草の刈り高が低く、第一節以下で刈り取ると、球茎が乾燥しダメージを受けるため、新たな分けつの成長を妨げる要因となります。翌年の収量を確保する観点からも10cm以上の高刈りは必須です（写真2、3）。

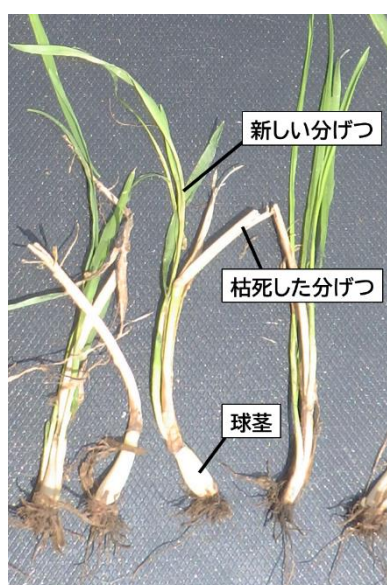


写真1 チモシーの部位



写真2 刈り高5cmの牧草地



写真3 刈り高 10cm の牧草地

②土・堆肥混入の回避

刈り高が低いデメリットとして、土や地際に残った堆肥・スラリー混入のリスクが上がります。サイレージの不良発酵を助長することです。特に、早春のスラリー散布量が多い場合や散布が遅れてしまった場合は、牧草の下部に付着したスラリーが残るリスクが高いため、注意が必要です。

飼料分析値を確認し、「粗灰分」が 8%以上の場合やサイレージをひとつまみ程取り、水でゆすいだ際に水が濁る場合は、土や堆肥・スラリーの混入が疑われます（写真4）。お手元の飼料分析値やサイレージを一度確認してみましょう。



写真4 原料草をすすいだ水

※写真は原料草ですが、サイレージでも同じように評価出来ます。

刈り高を調整するには、ゲタやソリと呼ばれるハイスキッドプレート（ハイカットスキット、ストーンガードなどとも呼ばれます）を使用します。ほ場内での機械の浮き沈みに影響されず、牧草を高く刈り取ることが出来るため、有効です。

高く刈り取ることでチモシーの再生を促し、植生の維持や翌年の収量確保が期待できます。自給飼料の重要性が高まる今、地域において必要な技術です。興味のある方は、各機械メーカーや普及センターにお問い合わせください。